

審査の結果の要旨

氏名 清河 幸子

本論文は、他者との協同が、問題解決において必要不可欠と考えられる「表象変化」を促す認知プロセスを明らかにすることを目的とするものである。

第1章では、他者との協同によってもたらされる妨害効果と促進効果に関する先行研究を整理し、背後に仮定される認知モデルと関連づけながら、協同によってどのような影響が生じるのかについて考察した。その上で、他者との協同によって表象変化が促進されるのは、個人では十分に機能しないメタ認知的活動が他者によって担われるためであるとする「メタ認知機能増進仮説」を提示した。また、先行研究によると、メタ認知的活動は、コントロールとモニタリングの2つに分けられることから、「コントロール機能増進仮説」と「モニタリング機能増進仮説」の2つに分けて、検討を行うこととしている。

第2章（研究1）では、「コントロール機能増進仮説」に関する検討を行った。具体的には、実験参加者に対してあらかじめ課題遂行役か相談役という役割を与え、相談役に対しては具体的なアイデア生成活動に従事することが困難となるような制限を課し、内容領域に関与せずに問題解決の方向づけというコントロール機能のみが与えられる条件を設けた。こうした条件でも、表象変化が促進され、仮説が支持された。

そこで、第3章（研究2）では、より厳密に統制された状況設定の下、「コントロール機能増進仮説」についての検討を行った。ここでは、相談役の発言内容を具体的に指示してメタレベルの働きかけに限定する実験群を設けるとともに、制限のない自由協同条件を比較条件として設定することで、メタレベルの働きかけの効果について評価した。実験群における効果は、多様なプロセスによって促進効果が生じていた自由協同条件と比較しても十分に大きなことから、メタレベルの働きかけが重要な意味をもつことが明らかにされ、コントロール機能増進仮説が強く支持された。

第4章（研究3）では、「モニタリング機能増進仮説」を検討するため、他者によって生成されたアイデアを評価するという状況が、より適切な状況評価を可能にし、表象変化を促すことに関わることを実験的に示した。ただし、ここでは、他者のアイデアであることを教示するという仮想的な協同場面を設定したため、実際の協同場面に比較して不自然な状況設定であるという問題点が残った。

そこで、第5章（研究4）では、役割交替が頻繁に生じる、より現実的な協同場面に近い状況設定を行い、研究3で得られた知見の妥当性を確認することとした。その結果、こうした自然な協同状況においても、アイデアの生成と評価をメンバー間で分担することによって、より適切な評価が可能となり、表象変化が促進されるということを支持する結果が得られた。

最後の第6章では、上記の4つの研究で示された結果を整理するとともに、上述の2つの仮説の評価と今後の課題の検討を行い、本研究の意義について考察している。

このように、本論文は、これまで個人的解決との比較のみが議論されがちだった協同問題解決について、具体的な認知プロセスを検討し、とくに、洞察問題解決において制約緩和が生じる過程での協同の効果を明らかにしたこと、また、これまでそのメカニズムが詳しくは論じられなかったモニタリングとコントロールという2つのメタ認知的活動について、その内容を精緻化したことは、認知心理学上の大きな貢献が認められる。また、学習における効果的な協同のあり方や、メタ認知の育成についての教育的な示唆も認められる。よって、博士（教育学）の学位にふさわしい論文であると評価された。